

# 熊本高専八代キャンパス国語科における 定期試験の廃止と新たな評価手法の導入について

池田 翼<sup>1\*</sup>

Abolition of Regular Examinations and Introduction of New Evaluation Methods in Japanese Education at National Institute of Technology (KOSEN), Kumamoto College, Yatsushiro Campus

Tsubasa Ikeda<sup>1\*</sup>

The Japanese education department at National Institute of Technology (KOSEN), Kumamoto College, Yatsushiro Campus has abolished regular exams and is now implementing evaluations that emphasize formative aspects. By evaluating students' grades based on their deliverables, it has become possible to motivate them to study in a more fundamental way. This paper reports on the background to the abolition of exams, the new evaluation method and the confirmed effects.

キーワード：高専教育、国語教育、評価手法、形成的評価、授業実践

Keywords：Education at KOSEN, Japanese education, Evaluation method, Formative assessment, Education practice

## 1. はじめに

熊本高専八代キャンパス（以下、本校）の1～4学年向け国語系科目においては、令和四年度より定期試験（中間試験を含む）を廃止し、形成的側面を重視した評価を行っている。LMS（Learning Management System）を活用した成果物等による成績評価を実施することで、学生・教員双方の負担が軽減され、本質的な学習への動機付けが可能となった。本稿では、本科1年生向けに開講している必修科目「国語Ⅰ」を主な事例として、試験廃止の経緯やそれに代わる評価の手法、確認された効果について報告する。

## 2. 移行の経緯

令和元年度までは、国語科科目においても他の座学科目と同様に中間試験・定期試験をそれぞれ年間2回ずつ実施し、その評点が成績評価の大半を占めていた。一方、同時期に改定が行われた学習指導要領において「生きる力」の養成が掲げられ、主体的・対話的な学びが重視されるようになるなど、教育をめぐる環境は変化していた。また同時に、高等学校等でも定期テストを廃止する事例が報告されはじめた。そこで、科目の到達目標と成績評価手法との整合性を再点検し、試験実施の是非を含めた成績評価のあり方について検討を行った。なお、「国語Ⅰ」の到達目標は次のとおりである。

- ①日本語運用能力の基礎として、漢字の読み・書きに熟達する。

- ②文章作成に関わる基礎的な技法を身に付け、適切な文章表現ができる。

- ③多方面の評論的文章を正確に読解し、その意図を把握することができる。また、その読解をふまえ、自分なりの考えを展開することができる。

- ④小説をはじめとする文芸的分野の言語表現を読解し、その概要を把握することができる。また、その読解をふまえ、自分なりの読みを展開することができる。

- ⑤様々な言語表現を読解し、その概要を把握することができる。また、その読解をふまえ、自分なりの読みを展開することができる。

以上のうち、①の「漢字の読み書き」は試験で評価するのが妥当だが、②以降の「適切な文章表現」や「考え／読解を展開」については、試験以外でも評価が可能である。むしろ、学生個々の事情に応じた時間配分・辞書や資料の適切な参照・ディスカッションや添削を踏まえた推敲があってこそ学習成果を発揮できる領域であるともいえる。このように、試験で測定していたのは到達目標の一部であるにも関わらず評価比重が大きく、かつ学生・教員双方にとって負担が高いという現状が確認できた。また、試験での成績評価は「一発勝負」になりがちであり、ともすれば「テストが得意」な学生の評価が高く、学習活動に意欲的に取り組んでいるものの、試験で失敗すれば低評点になるという事態も散見されてきた。普段の学習活動への取り組みにおける経験的側面を重視する科目の方針においては、形成的な評価が適しているという結論に至り、令和二年度よりトライアルとして前期中間試験の実施を取りやめた。その結果、特段の支障は生じなかったため、翌年には後期中間・後期定期試験を、令和四年度から全ての試験を廃止した。

<sup>1</sup> 基幹教育部門

〒866-8501 熊本県八代市平山新町 2627

Faculty of General Education,  
2627 Hirayama-Shinmachi, Yatsushiro-shi, Kumamoto, Japan 866-8501

\* Corresponding author:

E-mail address: t-ikeda@kumamoto-nct.ac.jp (T. Ikeda)

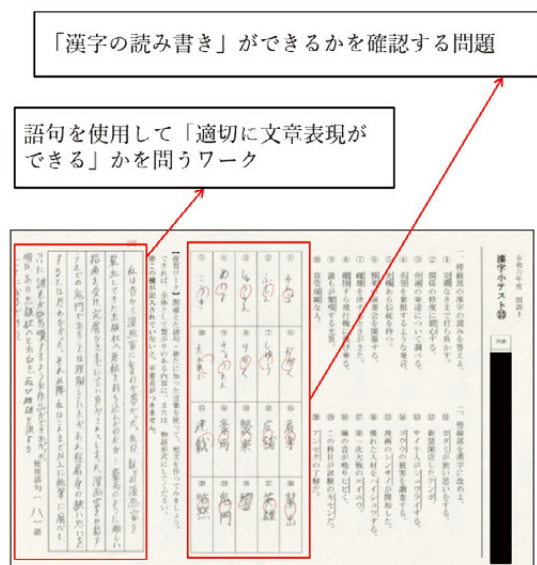


図1 漢字小テストの実施例

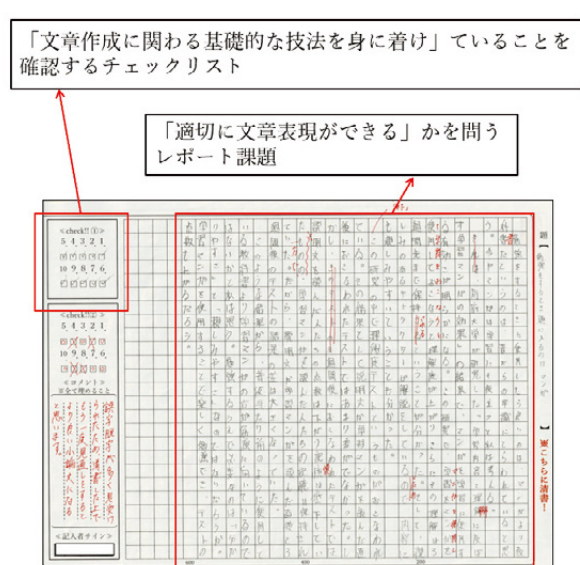


図2 小課題の例（小論文）

### 3. 評価の方法

本校国語科の授業設計は、学問領域の系統に沿った知識や技能の蓄積に主眼を置く「系統主義」よりも、学習者の興味・関心を出発点とした体験的・主体的な学びを重視する「経験主義」<sup>(1)</sup>に立脚している。この点からも、ブルームの完全習得学習理論に従えば、定期試験あるいは成績評価の大半を占める期末レポートのように、学習の総まとめとして到達度合いを測定する「総括的評価」に依拠する従来の評価手法は妥当性を欠くものであった。そこで、定期試験廃止後の成績評価の手法は、学習の過程において到達度合いや学習効果を随時測定する「形成的評価」<sup>(2)</sup>を中心とした。場合によっては、学習開始以前に行う評価であり、現時点での学力や興味関心を測定する「診断的評価」を取り入れている。なお、アクティブラーニングの手法および評価方法については、一部「学習評価ハンドブック」<sup>(3)</sup>を参考にした。以下、定期試験の廃止後に導入している「国語Ⅰ」の成績評価方法について、項目ごとに詳述する。

#### 3.1 小テスト（2～3割）

まず、漢字や文法に関する小テストでの評価にて2割～3割の評点をを行う。これらは主に知識・スキルを直接評価するものであり、従来定期試験にて測定・評価していた到達状況の確認に相当するものである。ただし、単に知識を問うものに留まらず、他の到達目標との関連も意識し、活発な学習活動を促すような工夫を取り入れている。図1に示した例は毎時冒頭実施している漢字小テストだが、読み・書きのテストを実施した後に、試験範囲に含まれる漢字を含む語彙を使用した小作文執筆の演習を行う。これにより、ブルームタキソノミーに示される「記憶」や「理解」のフェーズを「応用」の段階に接続することができる。な

お、この小作文の内容自体は評価しないが、記入されていなければ小テスト自体を評点しないこととしている。また、国語文法に関する小テストをLMSにて実施しているが、即時の採点と振り返り、および学習者へのフィードバックが可能である。その場で学習者の解答を参照し、誤答が多い問題のみを重点的に解説することなどができるため、診断的評価としても機能していると言える。

#### 3.2 小課題等の提出物（6割程度）

成績評価に占める割合が最も大きいのが、課題による評点である。学習内容ごとに、主に記述式の課題を設けている。基本的に授業時間内に解答するものであり、課題一つあたり10点程度の評点としている。年間を通して多数の評価を積み重ねるもので、平常時の学習活動への取り組みを評価する。図2に例示したのは、小論文の課題である。この場合も到達目標との関連を意識しながら、「何のための学習か」を理解・把握したうえで取り組めるように留意している。任意のテーマに沿って600字程度の小論文を執筆する課題だが、記述するうえで「文構造確認ノート」<sup>(4)</sup>での学習を基にしたチェックリストを確認する。さらに学生同士の相互添削によって、表現技法についての理解を深めながら、文章作成を経験する。この課題についても、小論文の内容についての評価は行わず、学習活動に取り組み、必要なスキルを身に付けたうえで、レギュレーションに沿った成果物を提出できたか否かを採点する。また、「診断的評価」としては、特定の作品を読解する前に、「ファーストインプレッション」として読後感を記述する課題などが挙げられる。学習者にとっての難易度や理解度を把握し、その後の授業展開につなげるという点では診断的に使用しつつ、同時に、「言語表現を読解し、その概要を把握することができる」という学習目標との関連において、提出状況を評点に加算することも行っている。

**設問 1** 冒頭で取り上げた「国語について」に関してお聞きします。

この内容について、資料や解説を確認し、空欄に当てはまる語がどのようなものだったか確認できていますか。  
また、資料および解説で示された国語の4分野の違いについて理解し、それらを学習する意義について把握できていますか。  
下記の項目について、「あてはまる」「あてはまらない」のいずれかを選択し答えてください。  
※全項目どちらかにチェックを入れてください。

	1. あてはまる	2. あてはまらない
「国語について」の資料を確認した。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
グループにて「国語」に対する考えを共有する際、自分の意見を提示したりメンバーの意見をよく聞いたりし、活発に意見交換ができた。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
「国語について」の解説を確認し、資料の空欄に入る語を把握したうえで内容について理解できた。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
「国語について」で示された国語の4分野の違いを理解したうえで、それぞれを学ぶ意義について把握できた。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
「国語」という科目の必要性や「国語に期待すること」を自分なりに整理し、記述することができた。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

**設問 2** 「国語について」で確認した「文学的作品」の成り立ちと、それ教材として学習する意義について自分の言葉で説明してください。

\_\_\_\_\_

**設問 3** 「文構造確認ノート」の(3)を聞いてください。

この内容について、ポイントを確認したうえで問題を解き、提示された模範解答に従って正誤判定ができましたか。また、回答の正誤を問わず、問題文の文法的な構造について理解することができましたか。  
下記の項目について、「あてはまる」「あてはまらない」のいずれかを選択し答えてください。  
※全項目どちらかにチェックを入れてください。

	1. あてはまる	2. あてはまらない
「ポイントの確認」の全文に目を通した。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
「ポイントの確認」に関する解説を確認し、その内容に従ってメモを取る／線を引くなどして要点を確認できた。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
練習問題に取り組み、全ての問題に自分なりに回答した。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
正答を確認し、正誤の判定ができた。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
自分の回答の正誤に関わらず、練習問題で示された文の構造について十分理解できた。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

図3 セルフチェックシートの例

### 3.3 セルフチェックシート（1～2割）

中間試験および定期試験の期間中には、それまでの学習内容の振り返りと到達度の確認のため、セルフチェックシートに回答してもらう。これも LMS（本校を含む国立高専では、日本データパシフィック株式会社の webclass を使用）を活用したものであり、総合的な自己評価として機能する。同時に、学生の理解度やつまづきを把握するという意味においては診断的にも活用できる。図3に例を示したように、四半期ごとの具体的な学習内容ごとに設問を設け、テキスト等を用いて振り返りながら到達度を各自点検する内容である。記述式の設問も含み、回答に要する時間は授業1コマ分の90分程度を想定している。個別最適な学習を促進するため、指定の時間内で終わらなければ家庭学習等での追記も許容する。また、ある項目の到達状況について、「あてはまらない」となった場合、復習や再度の学習を行ったうえで「あてはまる」に修正することもできる。自己評価の結果を確認し、記述内容等も含めて妥当であることが確認されれば、それを評点の一部とする。セルフチェックシートの内容は、LMSにて保存されるため、記入した学生自身からも随時再確認することができる。個別の単元の振り返りのみならず、科目の学習全般で得た成果や活用の可能性を検討し論述する項目もあり、記入内容は科目レベルのポートフォリオとしても機能しているといえる。

## 4. 移行の効果

評価手法の移行にともなって確認できた効果について、定量的な分析・定性的な評価・学生アンケートの結果から考察する。

### 4.1 定量的な分析から

定期試験廃止前から移行後にかけての、「国語Ⅰ」総合成績推移を表1に示した。まず、評価手法の変更にともない平均点が上昇していることが確認できる。評価の方法そのものを変更しているため単純な比較はできないが、学生の学習意欲が向上した結果と見ることもできそうである。続いて、標準偏差については、移行後にやや大きくなった。要因としては、普段の学習がおろそかであっても試験前の対策で高評点を得ていた学生が、評価手法変更後にともない評点を下げたことが想定される。同時に、高評価を目指すモチベーションのある学生が、確実に高得点を獲得できていることによるものと考えられる。

### 4.2 定性的な評価から

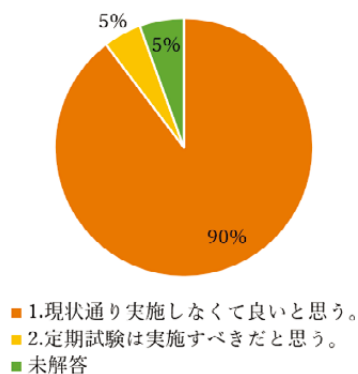
評価手法の移行後、学習の動機付けにおいて「試験に出るから」ではなく、「必要だから」「できるようになるため」という、学びの本質に根差した働きかけができるようになった。逆に言えば、「試験に出る」というある種の「マジック・ワード」を使わずに学習に向かわせなくてはならない。そのため、学習の意義を真剣に説く必要が生じ、授業の内容を再検討する契機になった。もちろん個々の学習活動自体が評価に関わるという点では、「評価のため」に学習に取り組むということも考え得るし、そのモチベーションの保ち方を否定するものではないが、主体的な学びを起動するには、「自分の成長のため」に授業に向き合ってもらい必要がある。授業を再構成し、学生主体の学習活動に多くの時間を割くにあたっても、定期試験を考慮しなくて良い点はアドバンテージとなる。また、本校学生向けに実施したアンケート調査では、通常授業期間中の家庭学習時間についてほとんどの学生が「1日1時間未満」であるという報告もあるなかで、試験期間外にも主体的に、かつ集中して学習してもらう取り組みが必要とされている。その点からも、通常授業時の学習活動を重視する評価のあり方は有効なものであろう。さらに、試験時に集中していた学生／教員双方の負担についても、軽減（あるいは通常授業期間に分散）することができた。

表1 「国語Ⅰ」総合成績の推移

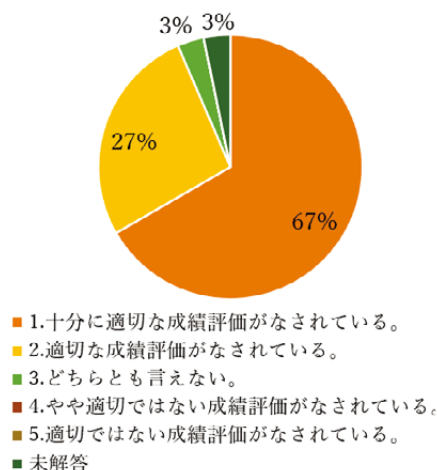
	試験実施	試験実施	前期中間試験 廃止	後期中間・後期 定期試験廃止	全試験廃止	全試験廃止
年度	H30	R1	R2	R3	R4	R5
平均点	83.18	83.26	85.15	90.17	88.69	88.21
標準偏差	7.26	7.46	6.51	8.77	9.04	9.77



Q1.国語科では現状定期試験を実施していませんが、それについてのあなたの考えを教えてください。



Q2.国語科では現状定期試験を実施していませんが、学習到達度合いに応じて適切な成績評価がなされていると思いますか。



Q3.現在、定期試験(全科目を通じて)にかかる負担はどの程度のものですか。

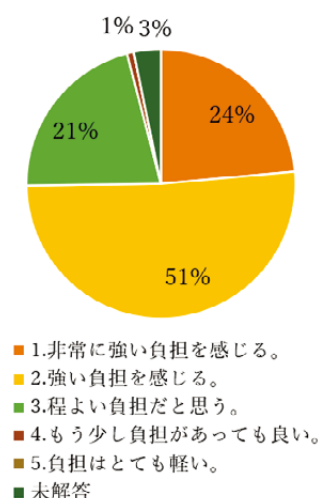


図4 定期試験に関するアンケートの結果

#### 4.3 学生アンケートの結果から

定期試験を実施せずに成績評価を行っていることについて、学生アンケートを実施した。対象は、令和6年度本科1年生(機械知能システム工学科43名・建築社会デザイン工学科46名・生物化学システム工学科41名)の計130名であり、Q1は126名、Q2およびQ3は123名から回答を得た。設問の内容と提示した選択肢、および得られた回答の割合を図4に示している。

Q1からは、定期試験を実施しないことについて概ね賛同を得ていることが分かる。アンケートに設けた自由記述欄では、理由として「試験の科目が増えると大変だから」という内容が多く見られた。ただし、先述したように評価にかかる課題等の労力を勘案すれば、定期試験よりも負担が少ないとは言いがたい。定期試験前に集中していた負担が分散されたことによるものであろう。また、「シラバスに書いてある到着目標は定期試験じゃなく毎回の小テストや演習などでも評価できる」「一定期間ごとに確認テストみたいな感じでやる方がみんなのモチベーションも上がる」など、核心を突いた意見も見られた。

Q2では、成績評価の妥当性について尋ねたが、こちらも概ね適切だと捉えられている。一部「どちらとも言えない」の回答があるが、自由記述欄には「頑張った人がそうじゃない人よりも明らかに報われるような評価方法をとって欲しい」という意見があった。実際は試験実施時よりも標準偏差は高まっているのだが、成績の良否にもっと差をつけて欲しいという声もあるようだ。

Q3では、国語科に限らず、定期試験全般についての負担について尋ねている。本科1年生で専門科目が比較的少ない段階にありながらも、少なくない負担を感じていることが見て取れた。この軽減・分散に、評価手法の移行が一部寄与しているものと考えられる。

#### 5. まとめ

本稿では、国語科において定期試験を廃止し、形成的評価を中心とした新たな評価手法を用いることで、様々な効果が確認されたことを提示した。定期試験によらない評価を行うにあたっては、妥当性や公平性を担保し得ているのか、常に迷いと葛藤を抱えながらの取り組みであり、当然課題もある。今後も様々な実践を重ねながら、必要に応じて修正を施して行く予定である。なお、付言すれば、科目の特性や授業方針によっては、定期試験は有効な総括的評価の手段であり、本稿はその価値や有用性を糾弾するものではない。しかしながら、様々な科目が多様な評価手法を試みることで、教育の多様性や個別最適な学びの促進へと開かれて行く可能性はある。また、試験期間中に集中してしまう教員・学生双方の負担を分散することができれば、ストレス軽減や学校全体のWell-being向上など、副次的な効果も期待できる。本稿がその一助となれば幸いである。

(令和7年10月7日受付)

(令和7年10月27日受理)

#### 参考文献

- (1) J.デューイ：「経験と教育」，講談社(2004).
- (2) 梶田叡一：「形成的な評価のために」，明治図書出版(2016).
- (3) エリザベス・F・バークレイ，クレア・ハウエル・メジャー：「学習評価ハンドブック」，東京大学出版会(2020).
- (4) 数研出版編集部：「適切な文を書くための文構造確認ノート」，数研出版(2017).